ぼ　く　の　気　持　ち

―保護者参加型の道徳の時間の取組み―

(1)　主題名　人間愛　〔２－（２）〕　　関連項目〔３－（３）〕

(2)　ねらい　生命に対する畏敬の念に基づく人間理解をもとに，感謝と思いやりの心をもって人に接することができるような態度を育てる。

(3)　資料名　「ぼくの気持ち」

(4)　授業の展開例

	学　習　活　動	主な発問と生徒の心の動き	留　意　点
導入	1　ガンの写真を見て，ガンについて知っていることを出し合う。	○これは何の写真だと思いますか。 ・内臓　　・ガン ○ガンについてどんなことを知っていますか。 ・助からない病気だ ・たばこを吸うとなる病気だ	○ガンに冒された内蔵の写真を提示する。 ○現在日本人の死亡原因の１位がガンであることを告げる。
展開	2　資料を読む。 3　「ぼく」の気持ちを考える。	○「医者から父がガンであることを告げられたときの「ぼく」は，どんな気持ちだったでしょうか。 ・信じられない ・まちがいであってほしい	○ＢＧＭを流すなど，情感を高める。 ○この時点では，自分に引きつけて考えていないので深く追求しない。
	4　第１次判断をし，理由付けを行う。	○「ぼく」はどうするべきですか。 ■告知すべき ・残りの人生を有意義に過ごすためにはちゃんと言った方がいい ■告知するべきではない ・死ぬことがわかったら，怖くてたまらないから	○ネームプレートを使って，個々の考えを表明させる。
	5　ガン告知に対する考えを読む。	○ガン告知には，様々な考えがあります。それを紹介します。これを読んでもう一度，告知すべきかどうか考えてみてください。	○告知についての二つの立場をまとめた文章を紹介する。
	6　第２次判断をする。（保護者参加）	○あなたが「ぼく」の立場だったらどうしますか。参観している保護者の方も一緒に考えてください。 ・告知する。隠しても泣いちゃってばれてしまうから ・告知できない。お父さんはああ見えても気が弱いんだから（保護者）	○自分の父親や自分にとって大切な人をイメージさせてから発問する。 ○参観している保護者にも参加してもらい，意見を求める。
終末	7　体験者の話を聞き，考えを深める。	・一言で思いやりと言うけれど，深くて重い愛情のあらわれなんだな ・自分は，力強く立ち向かえるだろうか	○ガンと闘った家族等告知についての経験のある方をゲストに招いてお話ししていただく。

「ぼくの気持ち」

ぼくは明日で二十歳の誕生日を迎える。九歳のとき母が亡くなり、父とぼくの二人で暮らしてきた。ぼくが小学生の時は、父は仕事を早く切り上げ、とまどいながらも食事の支度から掃除、洗濯までこなしてきた。中学生になるとぼくも少しずつ手伝えるようになった。実際にやってみるとなかなか大変で、料理を焦がしたり失敗することが度々あったが、父は、いつも笑いながら火加減の見方を教えてくれた。そのおかげで、今では料理はお手のものだ。父は、「おまえがよくやってくれるから、仕事に集中できるようになったよ。」と言ってくれた。

そんな父が最近早く仕事から帰ってきている。帰ってきて何をするわけでもなく、居間でゴロゴロしている。

「どうしたの？」

「だるい・・・」

気のない返事が返ってきた。仕事で何かあったのかなと思い、そのままそっとしておくことにした。

一週間しても、その調子は変わらずにいた。心配になって父の顔をのぞき込むと、「熱があるんだ。」と言う。「病院にいったら。」と勧めても、「そうだな。」と言い、眠り始めた。次の日も熱は下がってないようだが、父は仕事に行った。

そして、さらに一週間たっても父の熱は下がらなかった。父は元来丈夫で、病院に通うこともそんなになかった。そんな父がこんなに熱が続くのはおかしいと思い、

「明日仕事を休んで病院に行こう。」と言うと、

「それは無理だな。」と、明日の仕事の予定を話し始めた。

「だったら明日会社に行って次の日休みを取れるようにしてきてよ。」とぼくは懇願した。

「そうだな。こんなこと今までなかったことだし、一度病院でちゃんとみてもらうか・・・。」

ぼくは、父と一緒に病院に行った。いろんな検査が行われ、それは半日もかかった。すべての検査が終わってぼくと父と診察室に呼ばれた。

「肝臓が弱っています。もっとくわしい検査が必要なので今日から入院してください。」

先生にそう言われ、父はすぐに返した。

「入院はどのくらいしなければならないのですか。」

「はっきりとはわかりませんが、最低でも二週間は必要ですね。」

先生のその言葉に父はため息をついた。

「仕事のこともありますし、もう少し延ばせませんかね。」

「早いにこしたことはないんですよ。」

父は観念したように「わかりました。」と答えた。

「今から会社に行って、明日から休暇をもらうように言ってくるから。」

診察室を出ると、父はそう言い残して会社に向かった。

「先生からお話があるそうですので、もう一度診察室に行ってください。」

父を見送った後、受付の前で看護婦さんに呼び止められて、再度診察室を訪れた。

「家族は他にはないの？」
先生はいきなり尋ねた。
「はい。母はもう亡くなってますので。」
「他にご親戚とかは？」
「最近は、そんなに親しくつきあっていないので・・・あのう、なんですか？」
ぼくは少し不安になって聞いた。
「お父さんは肝臓ガンにおかされています。これが写真です。」
背後から白く電光に照らされたレントゲン写真やＣＴ写真に父の肝臓が写っていた。先生はガンの説明をしているようだったが、ぼくには何も聞こえなかった。
父がガン・・・。こういうのはテレビのドラマの世界だと思っていたのに。何かの間違いじゃないのか。
「手術はできるような状況ではありません。長くて一年。短くてあと三ヶ月だと思ってください。」

ぼくは気がつくと診察室の隅のベッドに寝かされていた。
「大丈夫かい。ショックだったね。どうにかしたいんだけど、どうにもできないんだよ。ごめんね。」
先生のやさしい口調に涙があふれ出てきた。
「ガンのことをお父さんに告知するかい。君にとっては大変な選択だと思うけど、この病院ではガン告知については家族の方に選択してもらうことになっているんだ。君が決断するまでは、私もお父さんには黙っているから。ただ、なるべく早くに決めてきてくれるかい。」
病院から家に帰る道のりは長かった。ガンのことを父に言おうか。言えば父のショックははかりしれないものがある。言わなかったら、父はやりたいことも満足にできずに人生を終えてしまう。
ぼくは、父とのこれまでの暮らしを思い返していた。思えば思うほど、考えれば考えるほど、告知すべきかどうか決めることができなかった。、そして、涙がとまらなかった。

ガン告知に対する二つの考え

告知したほうがよい		告知しないほうがよい
家族にとっては、患者がガンではないかとしつこく聞くのに、うそを言いつづけるのは大変な苦痛であり、告知すべきだと思う。	家族にとって…	家族にとっては、患者がガンでないかとしつこく聞くのに、うそを言い続けるのは大変な苦痛であり、つい白状したくもなるが、告知に耐えないと思う患者の場合は、家族がその苦痛に耐えるべきであろう。
残された時間を有効に使いたいから告知を望みます。その場になったら、あせるばかりでないかと自信はありません。しかし知らされないで、疑いを持ちながら、死に至るのはたまらない。	私だったら…	残された人生はせめて心だけでも明るく生きたいと思います。期限を告知されれば、そのときから暗い日々を送るようになると思います。たとえ病気でも明るい気持ちを持ち続けたいと思います。
私の権利です。そして残された可能性を試みるためにその時間を使います。可能な治療も受けます。治療法がないなら、残された時間に私の行うべきこと、仕事、社会的責任、家族への責任、自分のしたいこと、旅、その他山ほどやるべきこと、やりたいことをやってから死にたいと思います。	もしも，告知されたら	告知すれば、だれでも深刻に悩み、悲しみ、怒り、恐れなど、大変なショックです。それを乗り越えて、計画的に落ち込まずに生きていける人はごくわずかだと思います。
末期のガンであった父はたった２ヶ月の入院生活で逝ってしまいました。告知など考えも及びませんでした。しかし今時がたつにつれて、あの時父につげていたら、そしてその精神的苦痛を乗り越えてくれたなら、もっといろいろなことを話せたろう。そう考えるのは残された家族の身勝手でしょうか。	私の父は…	がんばってほしい一心で父にガンを告知しました。そうしたら、こう一言。「俺はブラックホールに落ちたんだな」まじめ一本の父は、それに耐えられるほどの強い人ではなかったのです。毎日「死」のみを見つめて、医者の言ったとおり、３ヶ月で逝ってしまいました。父には告知すべきではなかったと後悔しています。

活用に生かすための実践報告

◎「ぼくの気持ち」

１　主題の設定

ガン告知は,患者本人にとっては生き方,生きがいに関わるものであり，周りの人間にとっては思いやり，人間愛の在り方を深く考えさせるものである。人間の生死と関わる直接経験の少ない生徒たちにとっては，非常に難しい問題である。進路選択に迫られ，人間としていかに生きるべきかを考えなければいけない時期にある生徒たちにとって，人が生きるということの意味や生命に対する畏敬の念に基づく人間理解を進めることは重要である。特に，家庭での親子関係で悩みを抱えている生徒等，生徒指導上の課題を抱えた生徒の背景を理解した上で効果的な授業を工夫したい。

２　指導過程の工夫

導入では，ガンに冒された内臓の写真をインターネットから入手し，プリントアウトして生徒に示した。ガンそのものについての知識が乏しい生徒にとって充分な理解が求められるので保健体育科との連携をとり，事前指導をお願いした。また，告知についての二つの立場を,「家族」「本人」「体験者」それぞれの立場に分けて生徒に示すことで，告知の判断理由を整理して考えられるようにした。展開部分では，保護者と一緒に考えてもらえるよう，参観されていない保護者がもしガンと分かったらという設定（母親が参観している場合は，父親がガンと分かったという設定）で進めた。説話はゲストティーチャーのように実際の体験者が望ましいと思われるが，人前で話すことには，困難が予想される。テレビ番組などで取り上げられた方のビデオや，体験者の手記を活用してもよいと思う。

３　発問の工夫

前半では，資料の登場人物の立場に立って客観的に判断させ，後半では，保護者と共に，自分のこととして主体的な深い思考ができるよう発問し，後半に重点をおいた指導ができるよう時間配分に配慮した。

４　生徒の反応（授業後の感想）

生徒から次のような感想があった。

・告知すべきかどうかすごく微妙なところだけど，いつ人は死ぬかわからないから今を大切に生きた方がいいなと思いました。

・先生の話を聞いて感動しました。私も人に愛される人間になりたいと思いました。

・先生のお父さんの話を聞いてとても感動した。ガンの恐さはまだ体験したことがないから，わからないけど，本当に大きな悲しみなんだなと思った。

当日参観された保護者は,「親がガンになったとき，我が子はこういうふうに考えてくれるのか，ということが知れたことがうれしかった」と，後日，話された。

５　実践者からの一言

何か生徒の心に鋭く切り込めるものをやりたいと考え，自分の父が亡くなったときのことをもとに自作資料を作った。重たいテーマだったため，活発に意見を交流するという雰囲気にはならなかったが，いつもよりも真剣に考えていたように思う。感想の中に家族に対する気持ちを書いているものも多く，普段一緒に家族といることの価値を確認することもできたのではないかと思う。

（吉田中学校　和田治子）